

カネハラア・カネハラア

Kaneharaia kaneharai (Yokoyama)



2 cm

産地: 福島県東白川郡塙町
久保田層下部
(後期中新世, 1100万年前)
GSJ F17104

ちょっと変わった名前の二枚貝の化石です。本種の属・種小名は1924~1935年に地質調査所所長だった金原信泰氏に献名されたものです。金原氏は東京帝国大学の学生だった1898年に栃木県の塩原温泉の近くに分布する上部中新統鹿股沢層かのまたざわからこの貝の化石を発見し、1900年に論文で報告しました。その標本を研究材料として、1926年に東京帝国大学の横山又次郎教授(地質調査所元職員)が *Dosinia kaneharai* Yokoyama, 1926として新種記載しました。1936年には同じ標本に基づいて京都帝国大学の横山次郎教授が亜属 *Kaneharaia* を提唱し、その後に属(和名:カネハラカガミ属)となりました。

横山教授は1926年の論文で、同じく金原氏が鹿股沢層から報告したイタヤガイの仲間にも *Pecten kaneharai* Yokoyama (その後、*Chlamys kaneharai* (Yokoyama))と献名しています。この化石も第4展示室にあります。

カネハラカガミ属は、絶滅したカガミガイの仲間です。カネハラカガミ属の祖先は後期漸新世に北アメリカ北西岸に生息していましたが、中新世のはじめ頃に分布を西方の北西太平洋地域に広げ、前期鮮新世に絶滅しました。殻はカガミガイの仲間としてはやや大型で、卵形の膨らんだ形をしています。殻の表面には規則的な幅の広い肋があるのが特徴です。

日本ではカネハラカガミ属は4種が北海道から島根県にかけて知られています。第4展示室に展示されている *Kaneharaia kaneharai* は浅い海に堆積した主に泥交じりの砂層から見つかります。産出した地層の堆積物の特徴や古地理を考慮すると、波の静かな内湾を好んで棲んでいたようです。また、この種は中期-後期中新世の示準化石です。

カネハラカガミ属についての詳細は、次の論文でも紹介されています。

松原尚志・佐々木 猛智・伊藤泰弘(2009) ちりぼたん, Vol. 40, p. 23-28.

(地質標本館長 藤原 治)